



目次

表紙	1
タイトル	2
まえがき	
まえがき	5
目次	
目次	9
大津留公彦	
菊池さん桜田さん深谷さんへ	13
故・桜田和子	
会報から	17
佐藤ゆき子	
七十歳代の日々	21
杉原日出子	
私は私	25
谷口澄江	
仲間となりぬ	29
藤井元碁	
秋を詠む	33
藤田貴佐代	
海よ、命よ	37
本田倅世	
みぞれ降る河	41
松口光利	
広島を砕く	45
あとがき	

あとがき	49
奥付	53

表紙

湖畔短歌会 30周年記念

合同歌集

湖畔 第三集

2020年2月

タイトル

湖畔短歌会30周年記念

合同歌集

湖畔 第三集

2020年2月

まえがき

まえがき

はじめに

十年ぶりに我孫子支部合同歌集の発行です。我孫子支部（湖畔短歌会）が発足したのは一九九一年（平3）ですが、その前に「常磐沿線歌会」「松戸歌会」があり、それが枝分かれして現在に至りました。

この十年の間、支部のメンバーは四人減り、新しく谷口澄江さん、藤井元基さん、佐藤ゆき子さんが入会しました。

また、二〇一一年三月十一日は歴史を揺るがす東日本大震災が発生し、今なお放射能の影響で帰還困難地域まま、ふるさとへ還れない福島の人々が多くいます。我孫子市でも震度5の被害を被り、交通がストップしました。

歌集の出版は本田倅世さんが『地の星』を出版し、故桜田和子さんが第一歌集『春を呼ぶ』、第二歌集『秋を待つ』の二冊、藤田貴佐代が第四歌集『花の渴き』を出版しました。

学習会は活発で、①水野昌雄著『歴史の中の短歌』②同氏著『続・歴史の中の短歌』③同氏著『続・続歴史の中の短歌』④永田和宏著『近代秀歌』⑤同氏著『現代秀歌』⑥同氏著『作歌のヒント』⑦新日本歌人協会編『作歌の基本』を経て、現在⑧中野菊夫著『私の作歌法』を学んでいます。

ふるさと巡りの吟行会は「一茶双樹記念館（流山市）」「伊藤左千夫の墓（亀戸）& 亀戸天神」「深大寺植物公園（調布市）」「清水公園（野田市）」へ行きました。

今、私たちを廻る状況は、憲法を変えようとする動きがもくろまれ、戦争への道が開かれようとしています。戦争に「正義」なんてありません。

言葉は人の心を動かします。言葉の力でファシズムへの道を断ち切り、一人ひとりが大事にされる社会にしていきたいものです。

新日本歌人協会は「うたも創るが活動もする」と言う「運動体」です。この誇るべき「運動体」を立ち位置としてこそ希望の持てる明日が築けることを信じて止みません。

新日本歌人我孫子支部長 藤田貴佐代

目次

目次

はじめに	藤田貴佐代	p 5
菊池さん桜田さん深谷さんへ	大津留公彦	p 7
会報から	故・桜田和子	p 14
七十歳代の日々	佐藤ゆき子	p 20
私は私	杉原日出子	p 27
仲間となりぬ	谷口澄江	p 34
秋を詠む	藤井元碁	p 40
海よ、命よ	藤田貴佐代	p 46
みぞれ降る河	本田倅世	p 53
広島を砕く	松口光利	p 60
あとがき	大津留公彦	

大津留公彦

菊池さん桜田さん深谷さんへ

菊池さん
桜田さん
深谷さんへ
大津留公彦

一九五二年生まれ。大分県大分市出身。一九七二年コスモス短歌会入会、一九七五年新日本歌人協会入会。

以後東京、横浜、愛知、常磐線、吹田、我孫子、福岡、我孫子と各歌会に参加。「機関車のお医者さんへ」「今釈志津へ」「ともかとともに」「見返りは民主主義」を各電子出版。俳句にも注力し現在毎日一句、八首を「大津留公彦のブログ2」等やSNSに投稿中。俳句一句毎日投稿は10年、短歌八首毎日投稿は二〇一九年十一月十四日にて丸二年となった。

菊池東太郎さんへ)

今のところ「菊池東太郎さん死去」のみ与えらるる 受け留めるべき事ではあれど
「常幹」に夏まで元気に見えていたいつも隣で話していた
「来月の常幹会議には出れるかも」そう聞きたるが最後の電話
啄木の生誕地の近くに生まれたる菊池東太郎今は在らせず
順三の墓前に話す菊池さん姿が残る二月の広尾
淡々と喋る姿が残ったり去年の七月順三論をホームページには「発行人菊池東太郎」の
ままなるが気になりしとき悲しき報聞く

(桜田和子さんへ)

秋の夜に眠れず寝返り繰り返す 歌友の逝きたるメールを受けて
去年まで会場の確保をしてくれた貴女に冬は二度とは来ない
吟行会で訪いし流山旧街道に人連れてたと言ひし人逝く

会計の担当をし会場の確保をし歌会支えし君は逝きたり
日本橋で働いたこと懐かしそうにあなたは私に話して
歌会の途中で疲れを見せること気になっていた 今に思えば
喪服着て朝の用事を繰り上げて告別式にて君に別れむ
鯉泳ぐ池に広がる波紋あり あなたが急に身罷った朝

歌会の途中で疲れを見せること気になっていた 今に思えば
喪服着て朝の用事を繰り上げて告別式にて君に別れむ
鯉泳ぐ池に広がる波紋あり あなたが急に身罷った朝

(深谷武久さんへ)

沢田五郎の楽泉園の歌に感ず深谷さんとハンセン病者との交流
非売品の草川たかしの「処刑待つ部屋」に短歌運動の歴史見る君
八坂スミの「新陳代謝」読む時に何度も感動で止まったという君
一日分の給与出して買いたるは江口渙の「わけしいのちの歌」と
金丸辰雄さん牛久の歌会に行っていたか「風が少し出た」君に借りたり
盲目の広藤道明に感謝すると かわたれどきの蝸の歌に
深谷さん今への繋がり書き残す岩間正男の百里基地の歌に
深谷さん好むと残しし合歓詠う高沢義人の奥久慈の歌
日本名「クマモト」として殺されし季(り)の宗俊の歌君は残せり
植林の仕事が始まり大雨のみ歌会に出ると震災後の深谷さん
放射能どれだけ山にあったのか福島近くに住みし君なり
四時間をかけて会議に通い来し深谷さんと会いしは月三度
関わりも多くありては師と慕う赤木健介を熱く語りぬ
流れ星のように現れては消えて行った深谷武久安らけくあれ

故・桜田和子

会報から

- 1937年 富山市に生まれ、高校卒業まで過ごす
- 1956年 安田信託銀行本店入社
- 1959年 組合に婦人部をつくる運動に参加
- 1961年 早稲田大学第2文学部入学、1965年卒業
- 1997年 安田信託銀行を定年退職、以後松戸市で「九条の会」など
平和運動や街づくり運動に参加
- 2007年 新日本歌人協会に入会
- 2014年 第一歌集『春を呼ぶ』刊

大地震、津波と火事と放射能襲いかかりて死の街と化す
東北の流れ壊れし町々に更に雪降り耐える限界
家もなく食べ物もなく水もなく空襲あとの廃墟と同じ
繰り返す余震にさえも怯えて津波の恐怖 体動かず
「みんな無事」ただそれだけで電話切る娘は「後ろに人続くから」と
救援の募金を入れる幼子とそれを見まもる若き父親
自転車を停めて募金の箱を見る、若者は五百円玉コトリと入れる
大根と人参じゃがいも送りし後娘の電話は「風呂に入りたい」
原発に苦しむ民の「救援」に、原子力空母の寄港は要らぬ
震災と原発事故にあえぐ中「思いやり予算」通すを許さず
牛乳を搾って捨てる農夫なりインタビューの画面に涙流れる
見られること少なきままにこの年の桜は花を散らし始める

家・家族・仕事失い被災者は何を支えに生きていくのか
流失の瓦礫の前に立ちて吹く娘のトランペット亡母に届けや
この四月子は一年生になったはず遺品を捜す母諦めず
グラウンドに番号のみの墓碑残る三月経つ今不明者八千
本堂の隅に並びし骨壺は番号つけられ未だ帰れず
テレビには腐臭映らず梅雨に入る瓦礫の下は何がひそむや

放射能の数値に若き母達は水に、空気に、雨に怯える
原発は要らぬとドイツ決断す日本もゼロへ署名拡がる
沖縄を返せ「花を贈ろう」の歌ひびく献花する人あふれる通夜を

わが町の「九条の会」立ち上げで治安維持法下の闘いを聞く
思想犯で沖縄に送られし恋人を待ちし人今九十三歳喪主
自然・地理恵みあふれる千葉県で何ゆえ最下位、福祉・医療は

あの年の四月に孫は上京し今就職で新たな旅立ち
市民・野党力を合わせ千葉変える国も変えると メガホン握る
虐殺の歴史を知らぬかマロニエは泰然と立つ花は満開
スメタナもドボルザークもミュシャも皆民族の誇り問うた生き方
山の土削りて街を造らんとかさ上げ工事 道まだ半ば
線路今草に覆われ音もなし電車はいつかバスに変わりて

佐藤ゆき子

七十歳代の日々

1940年12月生まれ。2010年に新日本歌人協会に入会。2016年に湖畔短歌会に入会しました。医療、福祉に生涯現役を望み生きてきました。同時に、短歌にも集中できるように努力したいと思います。

介護

「めざむれば・・・」と言えばさらりと合作の短歌できたり雪の日のデイ
青空に梅檀の黄がよく映える六十八歳の初の絵手紙
夕暮れに次の季節がまじりあう一人暮らしのMさん思う
介護者が転倒せしとの連絡を受けて気が急ぐ雪の国道
氷雨のなか救急搬送し終えればゆるみし表情ミラーが映す
がん末期の居宅サービス計画を作りつつ偲ぶ逝きたる兄を
わが作る居宅サービス計画はひとり居の不安ぬぐうに難し
特養の入所は介護度3以上ますます増える介護難民
月々に二十万円の入所費をすすめ難かりケアマネ吾は
サービスをむしり取るがに削減す介護とどかず太る軍事費

いのちの重み

「つらいけど生きるよと決めた」と十三歳いのちの重み胸にあふれん
「戦争法、これはだめです」と高校生君らと守りたい憲法九条
片時もスマホ放せぬ中三が「ちひろカレンダー」をじっと見つめる
如月の相思樹の葉は緑濃く「ひめゆりの乙女」に思いを馳せる
「高樓」は学徒出陣の壮行に二度と学生にペン捨てさせじ
瓦礫ふるい娘の遺骨さがした人なれば再稼働への怒りは強し
「ただ日々の暮らしがあればいい」と言う亡き娘が教えた六年かけて
園庭の線量測りつつ保育する原発なくせの思い強くして（八年後のつばめ保育園）
「ふるさとを、生業を返せ」と訴える共に野音にありし君逝く
入口にスックと立ち咲く曼珠沙華原発反対の和尚の寺だ
飯館の「希望の牧場」厳寒をいかに過ごせしか雪ふりしきる

主婦はみやぶる

アベ首相の国会答弁の二枚舌主婦はみやぶる井戸端会議
高齢の「お茶と情けは濃い濃いと」わが出す朝茶めでし人あり
フルートの「コンドルは飛んでいく」しみじみと高らかに響く商店街に
ボク、右翼」と元自衛官の差し入れに指力強くダイヤルまわす
がん病む君うだる暑さの八月を発熱に耐え生活(せい) 保護(ほ) 申請(せいほ)
もぎたてのキュウリの味の恋しくて駅宣終えて支柱を立てる
不格好な折鶴なれど仲間入り流れる汗に猛暑を歩く
若きより平和を求めし住職と「一隅を照らす」を語り旅す
灯火たき「グリーンスリーブス」弾き語り心に住みし人びと送る

杉原日出子

私は私

還暦を記念して第一歌集「海」を上梓した時、奈良先生と約束した。「短歌を辞めない」「新日本歌人」を辞めない。約束を守って只々辞めなかったと言うだけで30年になるが、短歌の実力は一向に上達していない。しかし短歌への情熱に溢れ、知性、感性豊かな湖畔歌会の皆さんから私は何と多くのことを学んだことだろう。短歌は勿論、人間的にもちっけな私を高めてくれた歌友の皆さんに心から感謝。此の度、ベテランの皆さんと共に合同歌集に参加できたことは喜びである。生ある限り「短歌」と「新日本歌人」から離れることはない。(1945・8・9。新潟県佐渡。1989・新日本歌人に入会)、

妻でなく母でもない日の一人旅私の居場所は誰も知らない
途中下車ランチとワインは勝沼の「ぶどうの丘」が本命なり
太宰が見吉幾三と私も見た津軽平野とお岩木山よ (走れメロス号)
透き通る姿造りのイカの美味店主の佐賀弁旅の醍醐味 (佐賀県唐津)
旅終わり木枯らし一号吹く朝の駅頭宣伝に奮い立つなり
朝宣を終えしその足谷中まで老舗の珈琲飲むためだけの
選挙中何度言ったか「おはようございます」朝宣のビラ渡しつつ
半世紀「赤旗」配達日常なり今朝も確かむ足腰の無事
りんごよりりんご聞いて欲しいの死にそうに頑張った私の選挙戦 (せんきょ) を
持てるだけりんごを両手に抱き寄せて「りんごの唄」を小さ
く歌う (大子温泉・りんご風呂)
新年の始動の前の静寂さ「日出子徒然」に一年を記す
ベランダの笠木に冬日風もなく二株ほどの白菜を干す
鯉泳ぐ古布に紅絹の裏を付け小風呂敷成りひと日満ち居る
久々に幸田弘子のCDを聴く一葉は大人「十三夜」が好き
ちらし寿司いちご大福仕上がりて歌友迎える今日ひな祭り
アジ捌き筍づくしの春の夕美酒はふるさと佐渡の「真稜」
白髪染め止めた私と免許証を返上したる夫を諾う

転ばずに忘れ物落とし物なし無事帰宅今日の一日良き日と
しよう
骨密度血管年齢良好なり ならば満たせよわが林住期
「リスpekt」呪文のように繰り返す人間嫌いに陥った時

古稀にして達観などとは程遠くお人好しの性に何度も傷つ
く
傷ついた心はいつか癒えてゆくお人好しでも私は私
「友情と孤独のバランス」女流作家(さっか)の言うそろそろ友に会い
に行こう
子は一人なれども娘を育て娘に育てられ親となりたり
早世の母の齢をとうに超え今残生のどの辺りかと
極貧も真の孤独も味合わず終章の我に試練待つやも
身を挺し夫を介護の友多しわれはまだまだ介護の入り口
疲れたと思う日もある入院のたった一人の男の許へ
一生は無理でも一所なら懸命に生きたしヨーガの瞑想
映画と図書館ワインがあれば一人になっても生きていけそ
う

谷口澄江

仲間となりぬ

一九五三年生まれ 千葉県出身 二〇一七年新日本歌人協会に入会。
母もやっているからと安易な気持ちで短歌を始めてしまいました。「新日本歌人協会」が何であるかも知らずに入会し、それから短歌を作りだして二年余り。歴史を学ぶようにしか短歌にふれて来なかった私には、文学である短詩三十一文字はなかなか手強い。幸いにも巡り合えた湖畔短歌会です。大先輩の個性豊かな感性と情熱に鍛えて頂きながら詠い続けられたらと思っています。

こつこつと農の傍ら歌詠みし母の背を見て仲間となりぬ
歌添えて老いたる母と文交わすこの係わりよ時許すまで
二人して短歌の話弾みいるもっと早くに始めていたら
腰まがり地球に挨拶するように歩みて母は今日も畑へ
「海が見える波も船も」と声を上げ車椅子の母背筋を伸ばす
平成の田植え五月に早や終わり六月早苗饗(さなぶり) 民話となりぬ

菊坂の一葉住みし細き路地明治を覗き石段のぼる
闘病の足跡にふれ感じ入る子規庵出れば街のさわがし
武蔵野に若き面差し白鳳仏千年越えし微笑みに合う
一面のアカツメクサに踏み入れば草いきれムッとかけ上がり来る
この夏も戦争被害は報道し加害にふれず敗戦記念日
御巢鷹の犠牲者名刻む碑を前に肌ざわざわと言葉を無くす
群青の空に朱の雲輝くも信号待つ間に闇迫りくる
黒豆を好きという子の顔浮かべホーロー鍋出すさあ始めよう
元日に集いし子らを見送れば浅葱の空に月は色づく
寒に入りほころび始まる紅梅に春呼ぶ日差しきりっと注ぐ
こぶし咲く宝篋山(ほうきょうさん)を歩むとき春の息吹は頬をなでゆく
山里の春を訪ねてめぐり合う芹と三つ葉を陽だまりに摘む

産土の地にある句碑に菊供え町は兜太を静かに惜しむ
句碑の文字兜太の人柄そのままに大きくたく自由に踊る

オオカミも腹出す子らも山遊ぶ妻待つ秩父へ兜太は還る
藤棚の下で記した歌の上花はポトリと静寂(しじま)を破る
桜木に猛禽類の巢の在りて五羽のツミの子産毛の真白き
ふわふわの産毛にそぐわぬ鋭き目鈍く光りて幼くも鷹

青柿も拾いて絞り布に染む陽を浴びるほどに柿色となり
豊満な縄文ビーナス時を越え土偶の太もも輝き迫る
縄文人の語らいさえも聞こえ来る網代に編んだ小さなポシェット
桜田さんにかけてもらった一言は笑顔と共に宝となりぬ
老いし時どう心掛けて生きたかを隠し切れぬと身の引き締まる
齢重ね介護するよりされる身の覚悟問わるる 生きるは悲し

藤井元碁

秋を詠む

一九三八年生まれ。千葉県野田市出身。二〇一五年新日本歌人協会入会。長いこと俳句を詠んでいたが、発展的必然的に短歌を詠むようになった。つまり俳句・短歌と言う枠を決めずにもっと広範「韻文家」といわれる人達が多く出て来てよいと思う。「韻文家の出現」が待たれる現代なのである。短歌については今、次のように思う。「人生賛歌」これぞ傘寿の力が願いいのちをかけて詠み継ぎ行かむ

早稲酒をしみじみ飲めば黄昏の秋の陣屋に山の雨降る
白鳥の気品のなかにひそみたる荒くれの性八千里飛ぶ
真間の井に水波む乙女清らなるころの鏡そこにありせば
静かなる闘志と覇気にあふれきぬ火星の深紅仰ぎ見おれば
星月夜みちのく人は夢の中地震の荒浜風ぎて静けき
老いらくの夢無限なり曼朱沙華秋風のなか赤々と燃ゆ

大声をあげて己のあるを知る西日浴び立つ東尋坊崖
乗り換えてまた乗り換えて麦続く能登の旅空ただひらけ行く
耳(みみ)成(なし)も畝傍(うねび)も天の香具山も突如閃光秋雷の来る
への字口髭超然一点を見つめる父祖は農つらぬきし
ぼろろんとギター弾く手は半世紀前の秋の日ぼろろんと鳴る
風靡(なび)き匂うがごとき芒(すすき)原仲秋の空へわれは溶けゆく
しなやかに舞う白鳥に見入りしもわが青春は再びは来ず
林立する高層ビルを望みつつ江戸前の鯊釣る青べかの海
秋風をひと筋に行く大鷲の翼の澄める澄める羽音よ
ゆりかもめの鰯の群を取り囲み浮かぶ内海秋巡りきぬ
湖底の澄みてたゆとふ鱒の群れまぼろしのごと秋の深まる
楽しみが一つ増えれば増えるだけ人にやさしくなれる秋晴れ

秋真昼ごとりと揺れて動き出すわれひとりなる軽便鉄道
海渡り大陸目指す小白鳥群舞のさまを星空に見し
この島に哀しき遠流の歴史あり岬一面萱草咲けり

香り立つ佐久の純米新走酌めば木曾節鼻歌に出る
カーナビの記せし道はずれ来て祭太鼓の鳴る村にいる
当麻寺の明るき道避け猛き木々の根の張る暗き道をゆく

遥かなる安達太良の上雲は湧き夏から秋へ空澄み渡る
つくば嶺に一夏過ごすや赤とんぼくれない薄く村里を飛ぶ
中仙道バイク隊列一軍団木曾のカーブを見事に廻る
豆腐屋の笛は夕べに遠吠えは夜更けに聞きし昭和なつかし
白雲をオールで水に抱きこみて諏訪湖のボート初秋をゆく
テントの灯消せば広がる天の川黒き稜線夜のアルプス

藤田貴佐代

海よ、命よ

十九歳の時、ふるさとの山口県で短歌を作り始めてから、はや六十八年。歌集も『冬の翼』『涙河の花笛』『風の飛翔』『花の渇き』と四冊出版してきた。次は評論集か第五歌集になるか……。いまは人生百歳の時代。若い頃からひたすら「夢」ばかり追い求めてきた。そしてその果ては考えていない。昭和十七年生まれ。人生まだ夢半ばと思いたい。

米統治下の沖縄「高江」「ベトナム村」とされて
アメリカの統治下沖縄の苦しみがいま明かされる「標的の村」
ヤンバルの豊かな森と海がある一六〇人が暮らす高江は
自給自足で暮らす小さな村 高江 夜は満天の星がまたたく
辺野古より北へ車で一時間 基地に隣接 高江の村は
米軍が高江に造った「ベトナム村」模擬ゲリラ戦の標的として
ヘリパット高江に六カ所と「SAKO合意」訓練場の返還条件
「ベトナム村」として襲撃的 高江よみがえるがに「SAKO合意」いま
ベトナム村として標的にはもうならぬ高江のヘリパット阻止のハチマキ
対馬丸
「海よ、いのちよ」画面の荒海・絞る声「どれだけ話しても息子は戻りませんよ」
十七隻がすでに沈没の海をゆく学童疎開の満員の船
一六〇〇人の疎開者を乗せし対馬丸 古びて速度も遅き荷船よ
蚕のように上下二段の船倉が蒸し風呂となる真夏の疎開
米潜水艦に解読されていた暗号 対馬丸すでに狙われていて
闘いの苦難は長し箱口令から六十年経て建つ記念館
「希望の牧場一ふくしま」東日本大震災後六年
ゆったりと夏草を食む三〇〇頭「希望の牧場」の被曝牛たち
「寿命まで生かしてやりたい」牛飼いの哲学たらん殺処分拒否
山向こうに原発排気塔が見ゆ十四キロ圏内の「希望の牧場」
筋の亀裂は震災時より手付かずに三百ヘクタールの「希望の牧場」
日に五トン七万円の餌代を支える支援者あつての生存
満州の辛酸を嘗め引き揚げて築きし牧場 吉澤の父
チェノブイリになってしまったフクシマのどん底に「希望」を探す牧場
帰還困難区域六年 農作物は何一つなし葛生う田畑

太陽と青い海原がシンボルの請戸小いま児らの声なし
仮置き場のまま未解決四段積みのフレコンバッグ三千万個
悲しみの記憶
「最新の産業をここへ」と福島に原発誘致の巧みな言葉
出稼ぎの時代が終わると村が湧く原子力の本質論議が抜けて
出稼ぎの貧しい時代を脱けたいと原発誘致に山 手放すと
原発の予定地三百二十キロ かつては軍の飛行場跡
日中戦争最中 農家を立ち退かせ建設したり軍飛行場

本田倅世

みぞれ降る河

1944年生 歌歴 15年 歌集 [地の星]

所属 「合歓」 「新日本歌人協会」

怠け者かつ不器用で夫の介護もあるので多作ではない。「合歓」への投稿を済ますと力尽きてしまい「新日本歌人」への投稿は怠けてしまう。今回も「合歓」への作品を集めて、お茶を濁させて頂いた。どうかお許し下さい。

みぞれ降る河

主治医師は命の物差し持ちおりて夫の意識は戻らぬと宣う
「もしもしあの時ベッドを見ていたら」春の曇とよせよせ問答
「高次性機能障害」という語の謂わからなければ分かりたく無し
眠りいる君のベッドの軸先へへばり付きたり棹を差し持ち
星ふるようにみぞれ降る河こんこんの君が乗る小舟(ふね)彼岸へやらじ
聴覚は醒むるにあらんCDに「モーツァルト」と君は漏らせり
諦めると子は迫れども私は情け島の血をひく女(おみな)
ああ奪衣婆の差しがねなるか船頭のわが膝小僧骨折をする
たぎつ瀬へ君の小舟が寄りゆくを見送るほかなし川面が燃える
(急性期治療終わるも覚醒せずと療養型へ転院勧告)
眠れる森の住人と君は見做されて医療制度に仕分けられゆく
目を開き「この前はどうぞ」と挨拶す夫はわが家のベッドに咲(わら)いて
この春は死の鏡面にちる桜 生死のあわいを君と揺蕩う
たより
春告げ草のつぼみが固き日郵便が「後期高齢」と告げて来たれり
「後期高齢」と画されければ夫とわれの年の差一歳がにわかに大き
初孫のマホちゃん雛会の写メール来「立っちができた」と春を知らせて
初雪の降るころ夫にも「たより」来てそれより老々介護に入らん
点描に桜花びら降りしきり煙らいながら人世移ろう
はつなつの点描
「五月蠅い」をうるさいと知る五月雨(さつきあめ)平成変わり令和へと降る
真夜目覚め「令和令和」と唱えいる夫はデイへの予習(ならい)するらし
「令和、令和」と声に文字(もんじ)に習いおり半生西暦に生きし君が
中空に茜の色が絞られて閉じゆく様を夫と見ている

残ん世のましろな便箋に二人のこと綴りてゆかな猫のはなしも
蒼空(あおぞら)へ窓あけ放ち湖(うみ)からの君のたよりを耳すまし聞く
ありったけの真風(まじ)を吸いこみ舗道(しきみち)に声をあげており「憲法変えるな」
麻痺すすむ憲法とおもうりハビリをなすごと今日の声を強める
駆けよりに落とししビラを拾いくるる聞かぬふりして過ぎし若人
初めての同性婚裁判憲法の追い風はらみ船出してゆく
あの角の向こうはひそとふくらかに朴の木の花匂える小藪
折檻に逝きし子たちを抱くごとく朴の白花が雨をふふめる
「ゆっさゆさ」風にうねりて響(な)る櫂かかる力に抗えと言う

松口光利

広島を砕く

公務員。二〇一一年から夏と冬に各一週間、陸前高田と気仙沼でボランティア活動を行っている。二〇一三年からサマーコンサートとクリスマスコンサートを陸前高田と気仙沼で開催している。二〇一九年夏にはオカリナコンサート、蕎麦打ち体験や親子習字教室を行った。

今後は福島県でのボランティア活動を重点的に行って行きたい。

石の壁にガラス刺さりぬ一瞬にリトルボーイは広島を砕く
爆音と爆風が同時に轟きて元安橋が左右に吹っ飛ぶ
きこ雲が姿を変えて雨となる広島の街を真っ黒にして
七千度の熱線に溶けて鉄骨をあらわに曝しドームは佇てり
乗り慣れし伸一ちゃんの三輪車爆風に飛び形とどめず
銀行の石段に黒く焼け爛れ「人影の石」よりにじむ悲しみ
熱に溶け醤油のしまを作るビン被爆のままに五十年経し
人間の影もとどめぬ爆心地生き残りたるは幽霊の如し
六千度の熱風は瞬時にて人影までも焼きて石あり
竹やぶに逃れ根元を抱きて伏す人らもろとも閃光が焼く
「水・みず」叫びて川辺へたどり着き力尽きたり屍の山
累々と屍の列の連なりて抱き合う姉妹も焼けただれいる
うず高く折り重なりし屍にいま静かなり虹のかかりて
炎の中焼けただれたる母と子は水の深みに足とられおり
一瞬の閃まかれて逃げ惑う母と子どもの地獄絵に対く「雨だれ」の曲
学校へ行きたい友と遊びたい不登校二百日悶々と児童は
不登校の子に手紙書く三十名「声かけるね」とメッセージカード
不登校の君に届けし雛人形十二単の和紙の明るさ
不登校の児童に届けたるピアノ集受話器に流れる「雨だれ」の曲
久々に登校せし子の声が高ぶる足元に咲くタンポポの花
手びねりの小皿の底の指跡に強く残したい自分の存在
不登校の君のもやもやした気持ちぶつけて欲しい届けし粘土に
手賀沼湖畔
手賀沼の湖畔に建てり平和の碑爆風に焦げし側壁並ぶ
真黄色の銀杏の落葉にしゃがみ込む直哉は慧子の死に逢いてより

晩秋の沼のほとりに糸垂れる親子の姿湖面は映す
冬晴れの沼を見下ろす楚人冠碑アカマツ林を風が鳴らして
冬空に黒御影石輝きて血脇守之助の碑風受けて建つ
手賀沼を一望できる庭に立ち構想めぐらす実篤偲ぶ
紅の紅葉の先の空澄みて実篤の筆もひとときわ冴えん
手賀沼の三日月うっすら光り増す実篤直哉の住みたる跡に

あとがき

あとがき

「合同歌集 湖畔 第3集」をお届けします。
この合同歌集は湖畔短歌会の四番目の合同歌集となります。
二〇一二年の「あれから一年一わたしたちの震災歌集」以来七年振りの発行となります。
九人各三十首計二十七歌です。
前回の震災歌集は陸前高田市の戸羽市長のご好意により一本松から作った仏像を表紙に使わせて頂き陸前高田市への寄付とする為有料で初めましたが現在は無料にて電子出版しています。

今回も電子出版致します。この間メンバーの加入がありましたが既存のメンバーは健在です。

但し一人亡くなった方がいます。震災歌集に「被災地に生きる」という歌を寄稿された桜田和子さんです。桜田さんは昨年亡くなりましたが最近第二歌集「秋を待つ」を出版されました。病床にてご自分で校正をされたので遺歌集ではなく第二歌集です。

湖畔短歌会は残された者で新しい歩みを始めています。

「合同歌集 湖畔 第4集」にて遠くない内に再会致しましょう。

二〇二〇年二月 大津留公彦

奥付

湖畔第三集

発行 新日本歌人協会我孫子支部 湖畔短歌会

発行日 2020年2月

合同歌集 湖畔第3集

著 新日本歌人協会我孫子支部湖畔短歌会

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
